

カメラで撮影中



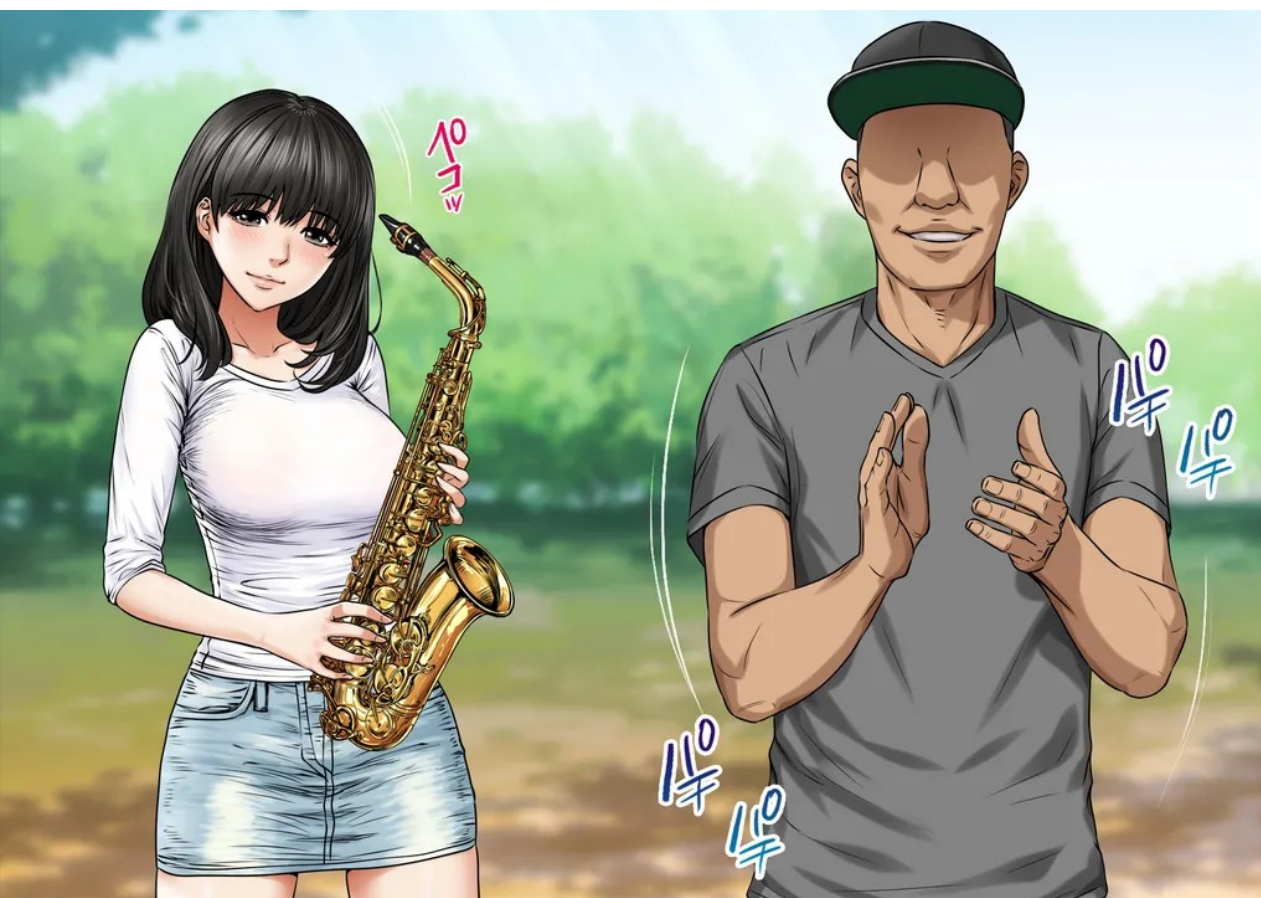
世間知らずの娘
サックス編

こんの みき
『紺野 美樹』

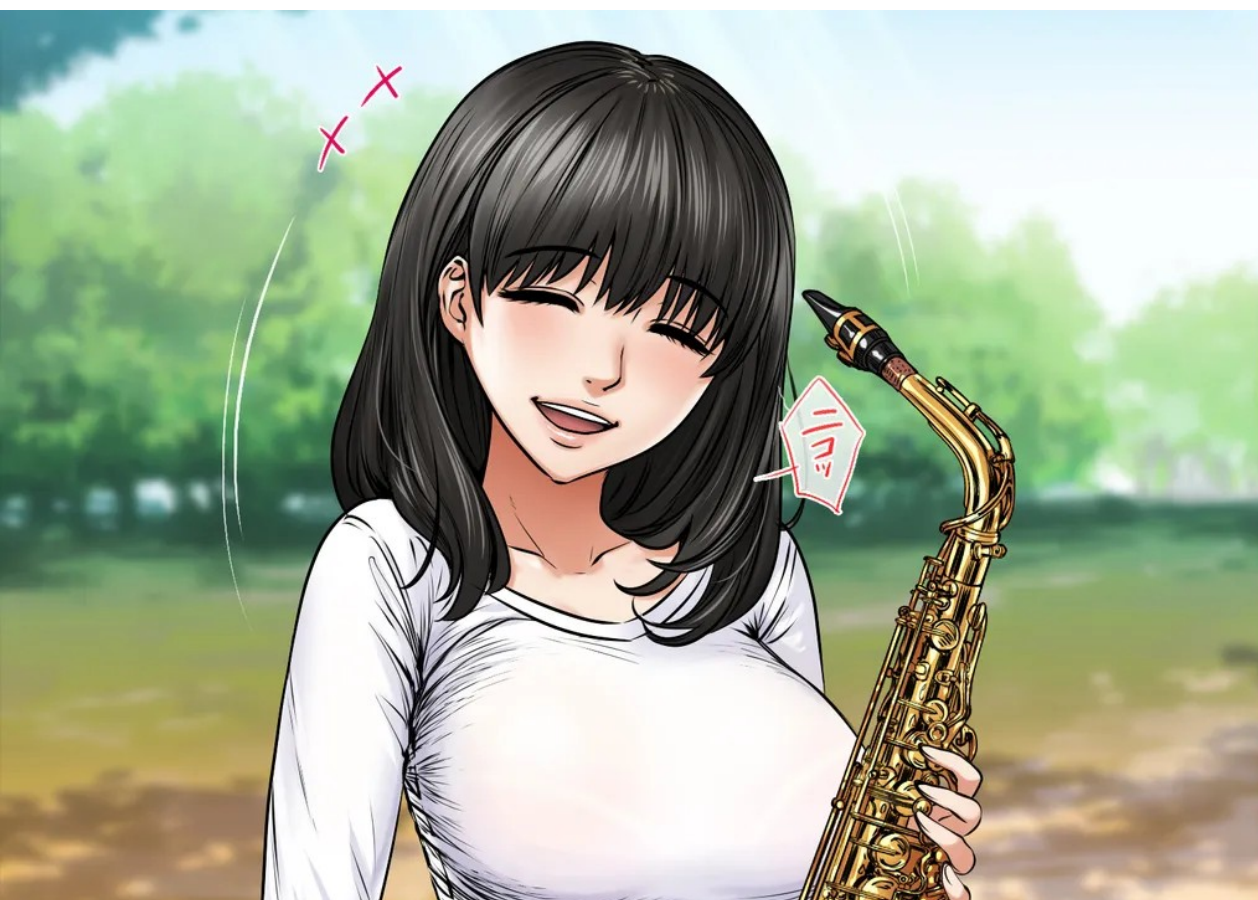
両親の期待を一身に受け、有名な進学校に通う。
勉強ばかりの日々の中でサックスに出会い、
その魅力に魅了されてのめり込んでいく。



両親はそんな美樹をよく思わず、受験が終わるまで
サックスを禁止すると言いつつ出した。
耐えられなくなった美樹は反発し、愛用のサックスを手に
家を飛び出していきつけの公園へと避難する。



「ご清聴ありがとうございました。」
いつものように公園で小さな演奏会を終わらせ、
美樹はニコリと微笑んだ。
パチパチと拍手がまばらに起こる。



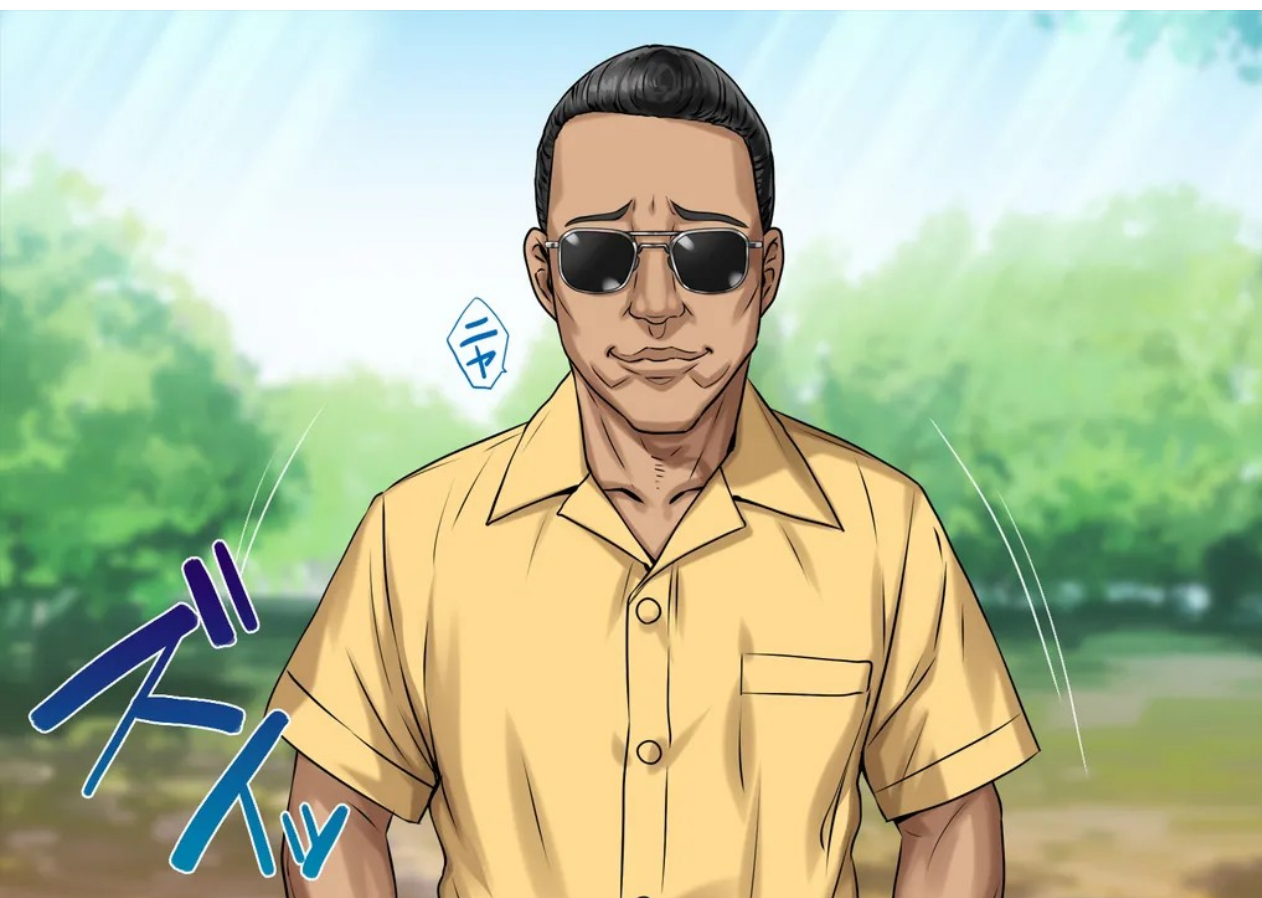
「また聴きにきてくださいね。」
少数とはいえ、自分のサックスを聴いてくれる人が
嬉しくて、美樹に笑顔が浮かび上がる。



「いやあ、よかったよ！
まさかこんなところに原石が眠っていたなんて！」
「えっと…」
突然声をかけられた美樹は戸惑いから不安な表情になった。
男はお構いなしにズカズカと近寄ってくる。

「おっと、これは失礼。実は俺も音楽をやっている身でな。
たまたま通りがかったらサックスの音が聴こえてきたさ。」

美樹の緊張をほぐそうと、興味の引きそうな話題を
語りながら更に距離を詰める。

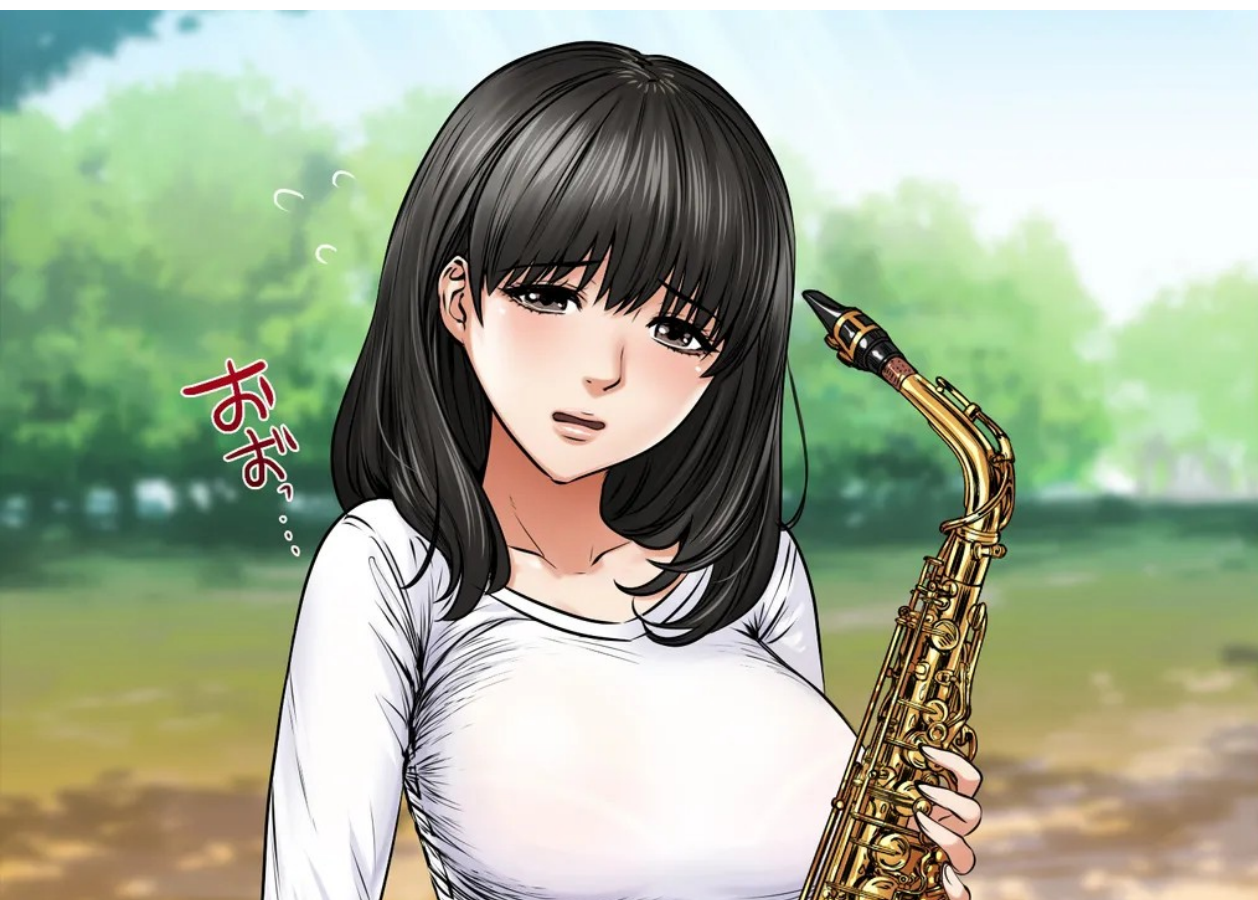




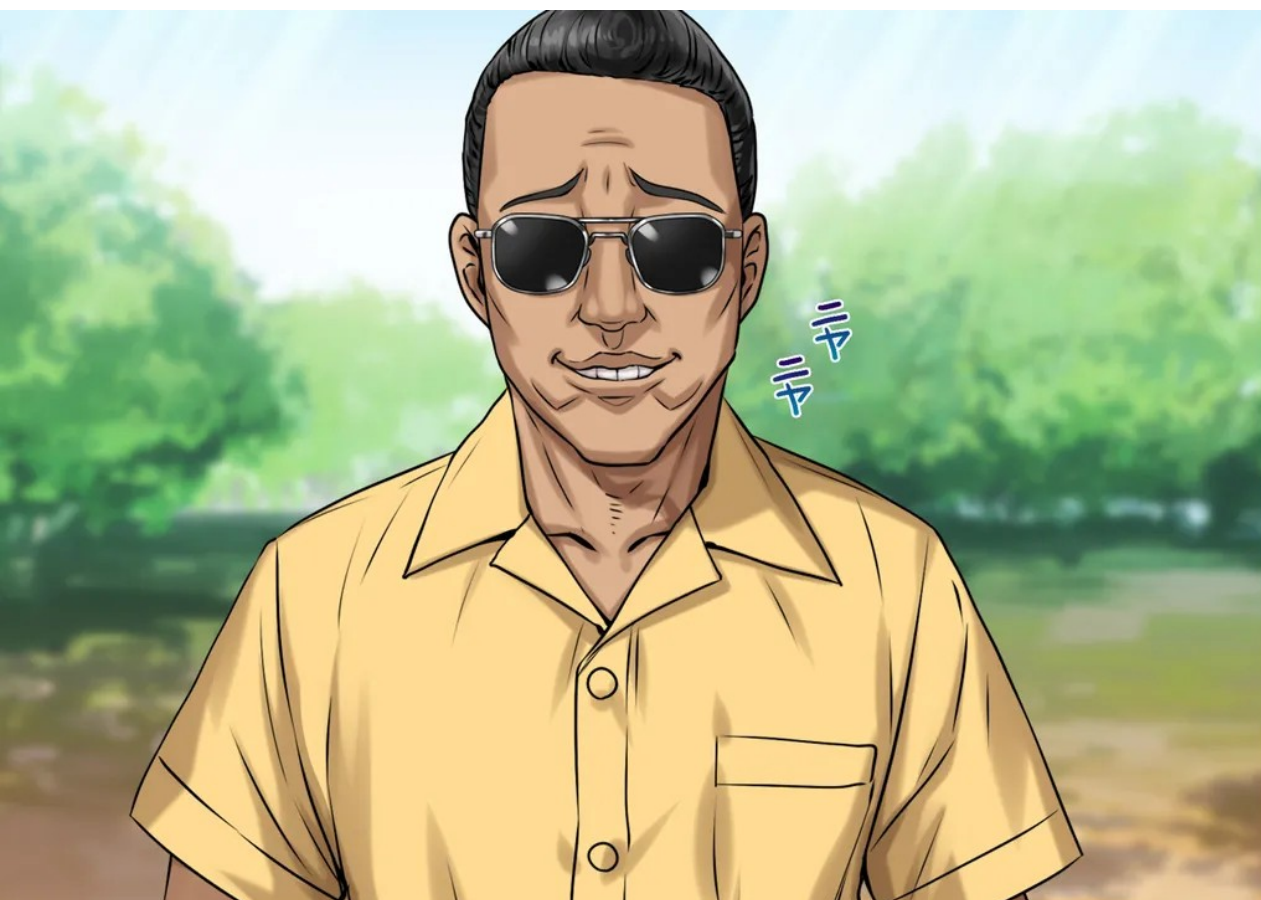
「そうだったんですね！」
「君は中々筋がいい。音楽を楽しんでるのがよくわかるよ！」
「本当ですか！」
「もしよかったらプロを目指してみないか？」
男のサングラスがキラリと光った。



「え、そんな私なんか……」
「なんかとか言っちゃダメだよ！君には可能性がある。」
少々強い口調で男は語った。
美樹はその熱意にタジタジになりながらも内心嬉しかった。



「お話はとても嬉しいんですけど
その…親が許してくれないので、このお話はなかった…」
美樹の言葉は明らかな不本気な意思が見られた。
声がすこしずつ小さくなっていく。



「いやいや、その才能を埋もれさせるのは勿体ない！
親御さんへの説得は俺も協力するから。……なあ？」
「え、でも……」

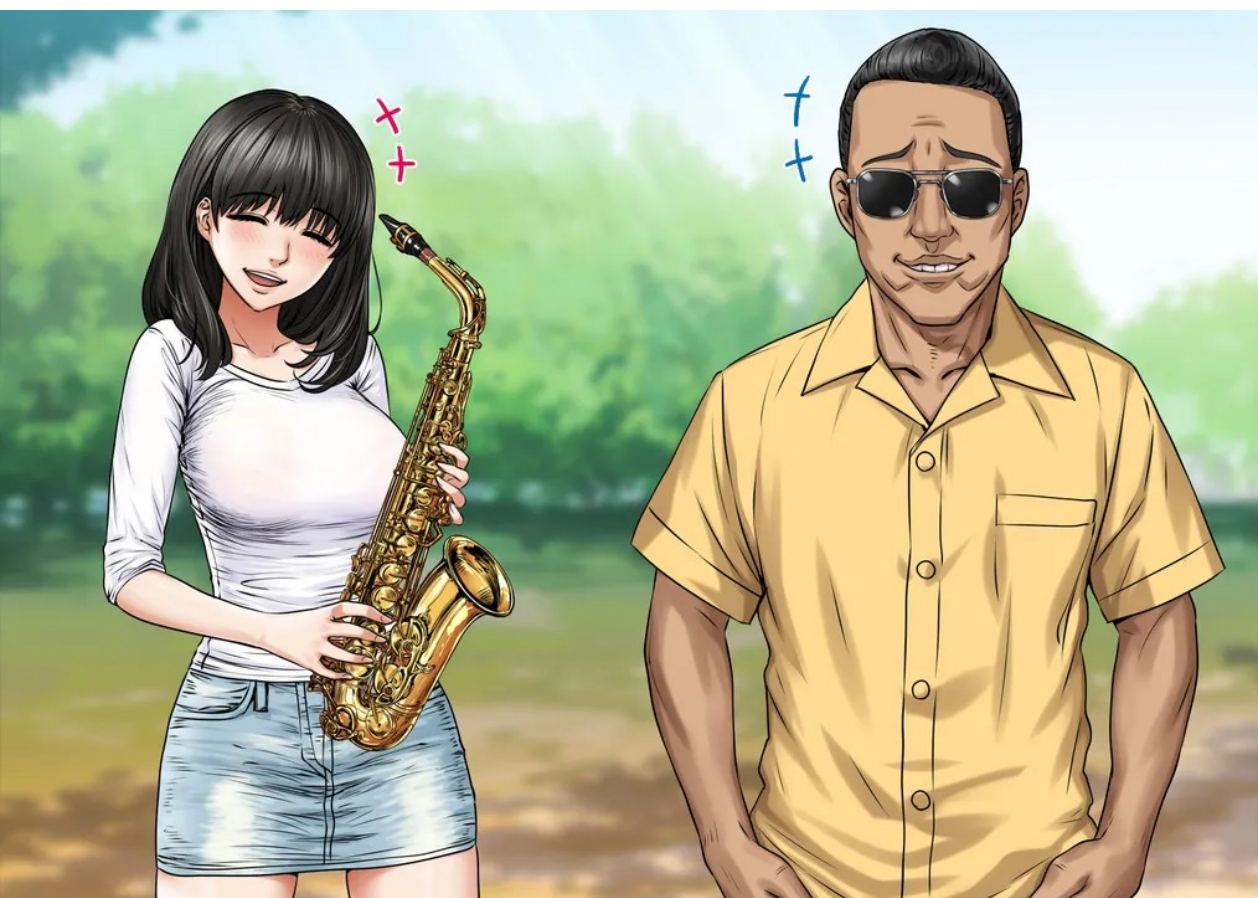
美樹の中でコロコロが揺らいでいた。
親と夢の二つが天秤にかけられてぐらぐら左右に傾く。



「うーん…じゃあ、ウチのスタジオがすぐそこなんだけど
一回そこで個人レッスン受けてみない？」
「スタジオが近くにあるんですか？」
（今まで気づかなかった…音楽スタジオなんてあったかな）」
「そうだよ、今まで気づかなかったのも無理ないか。
完全防音完備だから音漏れもないしね。」



「プロの指導を一度受けてみるのもいい機会でしょう？」
「あ、でも私…お金……」
「ああ…いらん、いらん。誘ったのはこっちだしね。
俺は君がやりたいかどうかを聞きたいんだ。」
指導だけでもという軽い言葉に、美樹の天秤が傾いた。



「それなら…ぜひ、スタジオに行ってみたいです。」
「あ、いい返事や！俺の指導は厳しいから覚悟してな？」
男がケラケラ笑うと、美樹はドキドキしながらも
「お手柔らかにお願いします。」と返した。

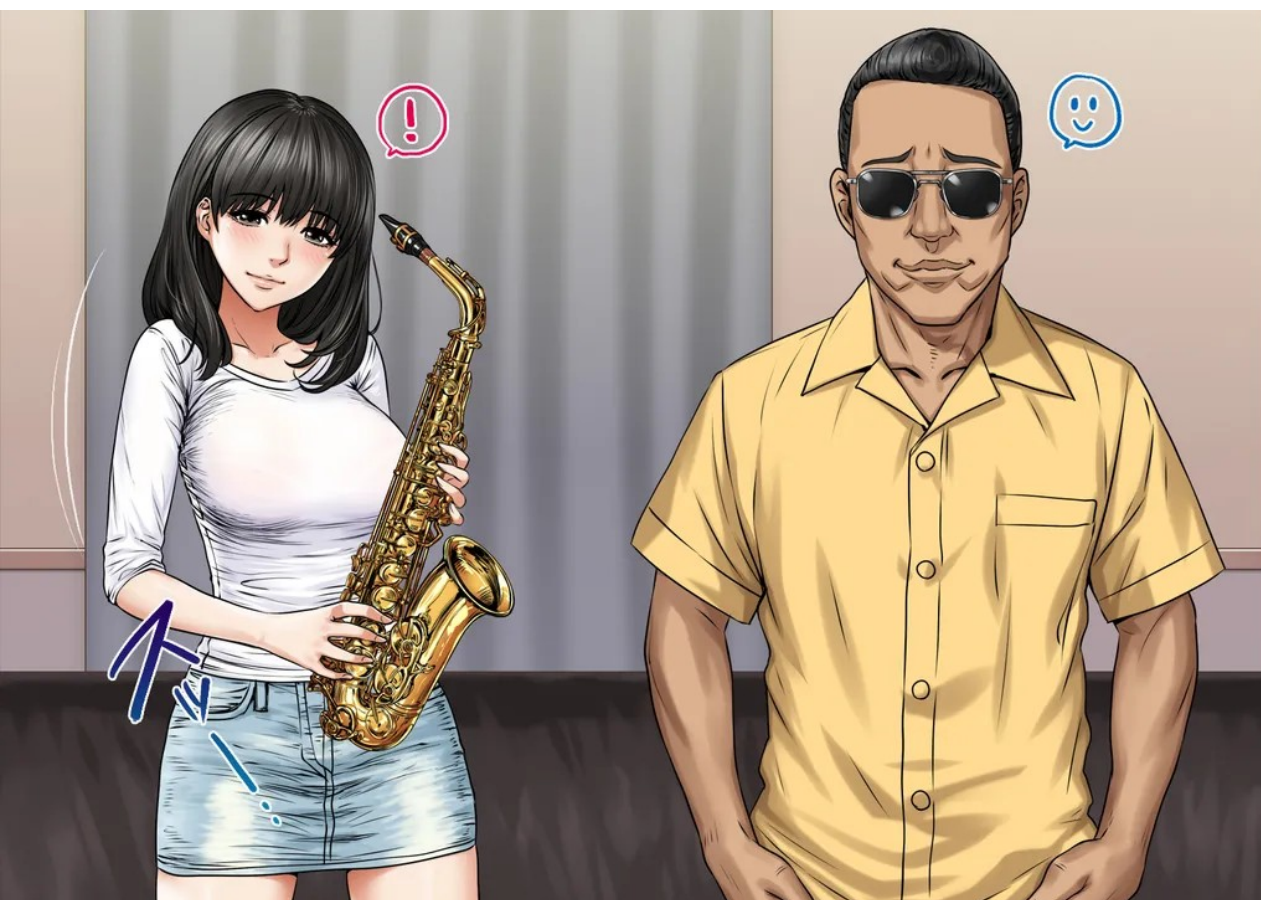


こうして美樹は、近くにあるというスタジオへ向かう……

「ここがスタジオ…(こういう所は初めて来た)」
「まあ…緊張しないで、楽にして。」

美樹がキヨロキヨロと部屋を見回していると、男が声をかける。
がしかし、美樹は初めての場所に興味津々。
視線があちこちに動き回った。

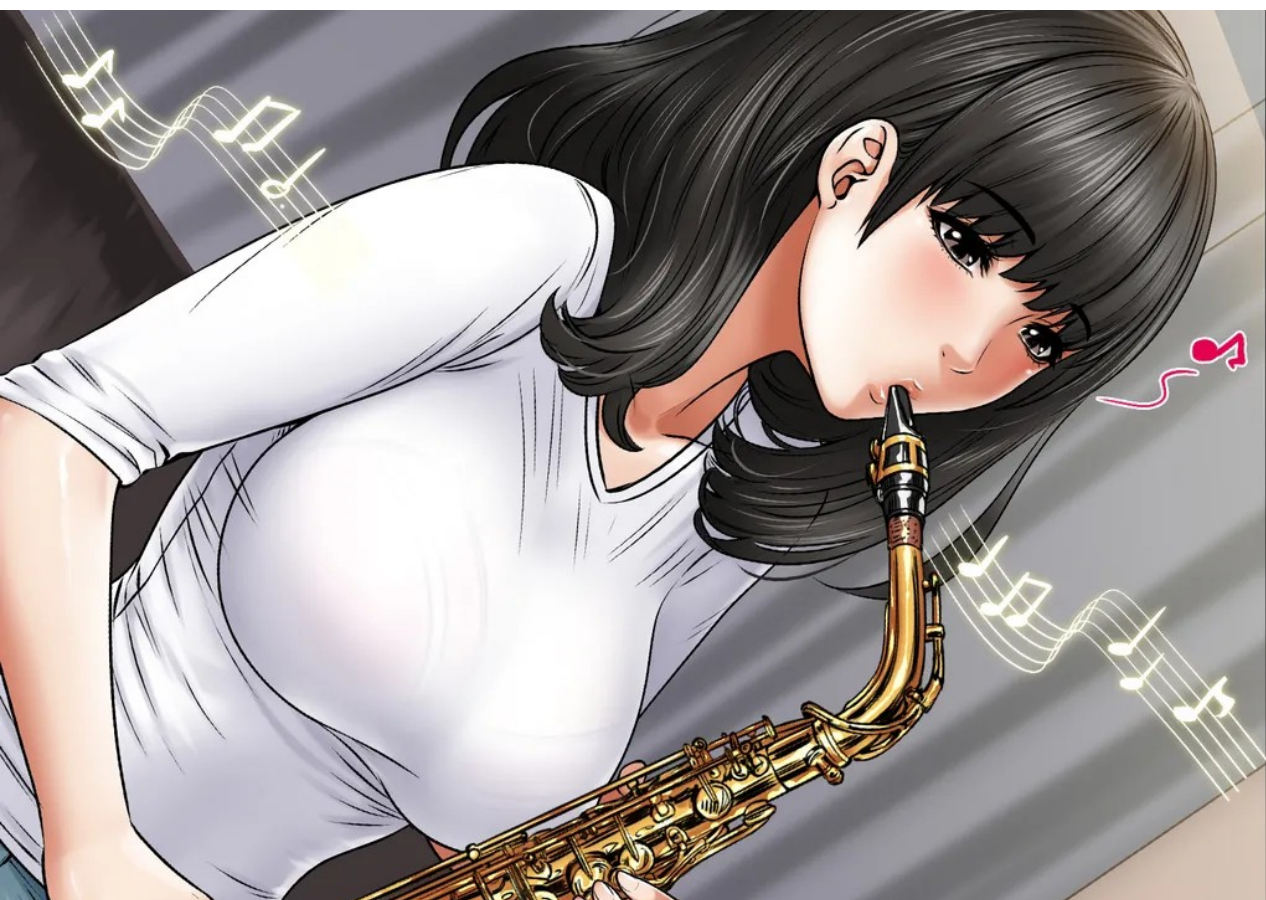




「よし、早速だけどレッスン開始しようか。」
「は、はい……よろしくお願いします。」
「最初はとりあえず、好きに演奏してみてください。」
部屋の中央に美樹を立たせ、レッスンを開始させる。
自前のサックスを取り出し、緊張しながらも息を吸い込んだ。

美樹の奏でるサックスの音色が部屋中に響き渡った。
公園での聴こえ方と違い、なんだか不思議な感覚になる。

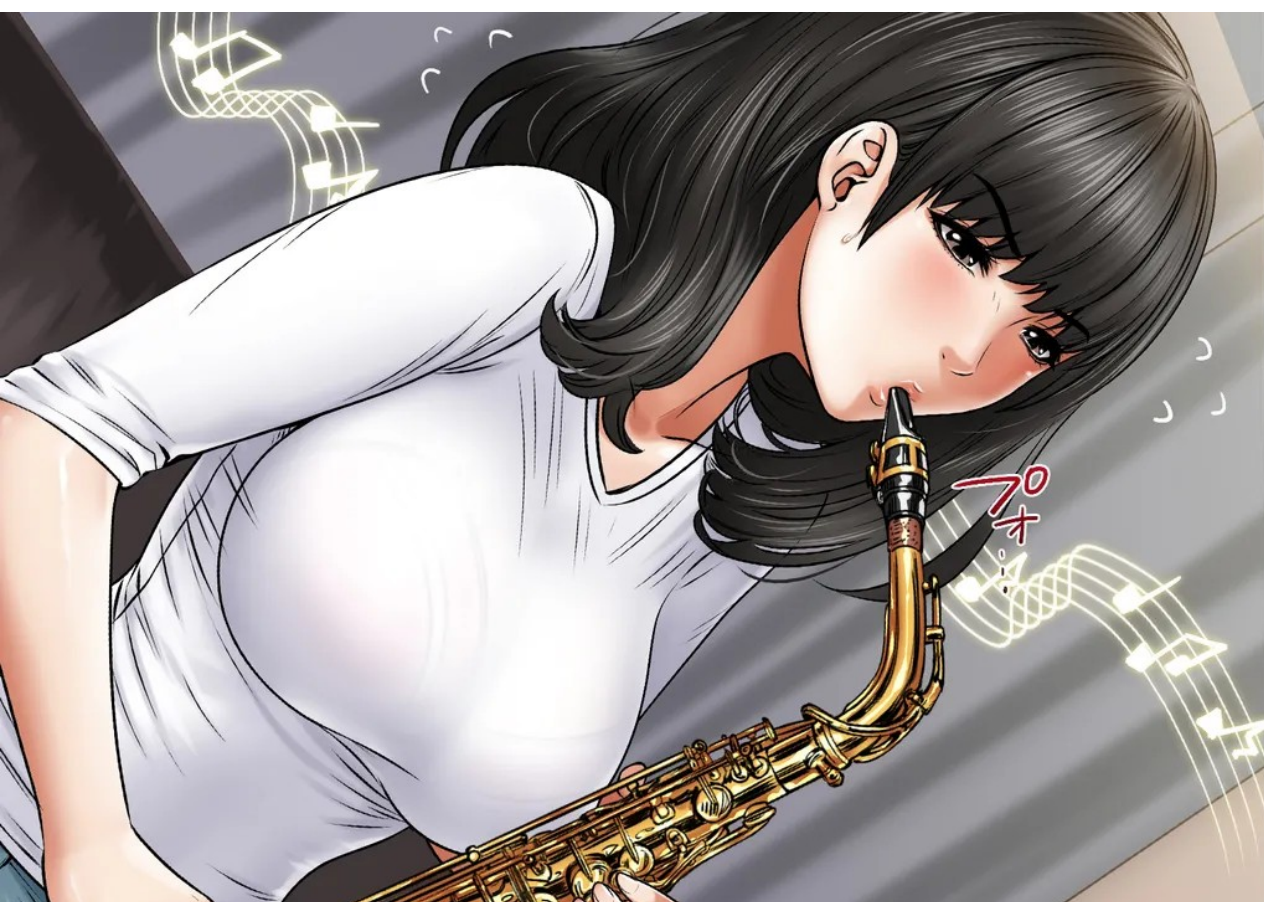
「……(外でやるのと全然違う。音がすごい鮮明に聴こえる)」
演奏をしながら、美樹は初めての感覚に胸をときめかせていた。



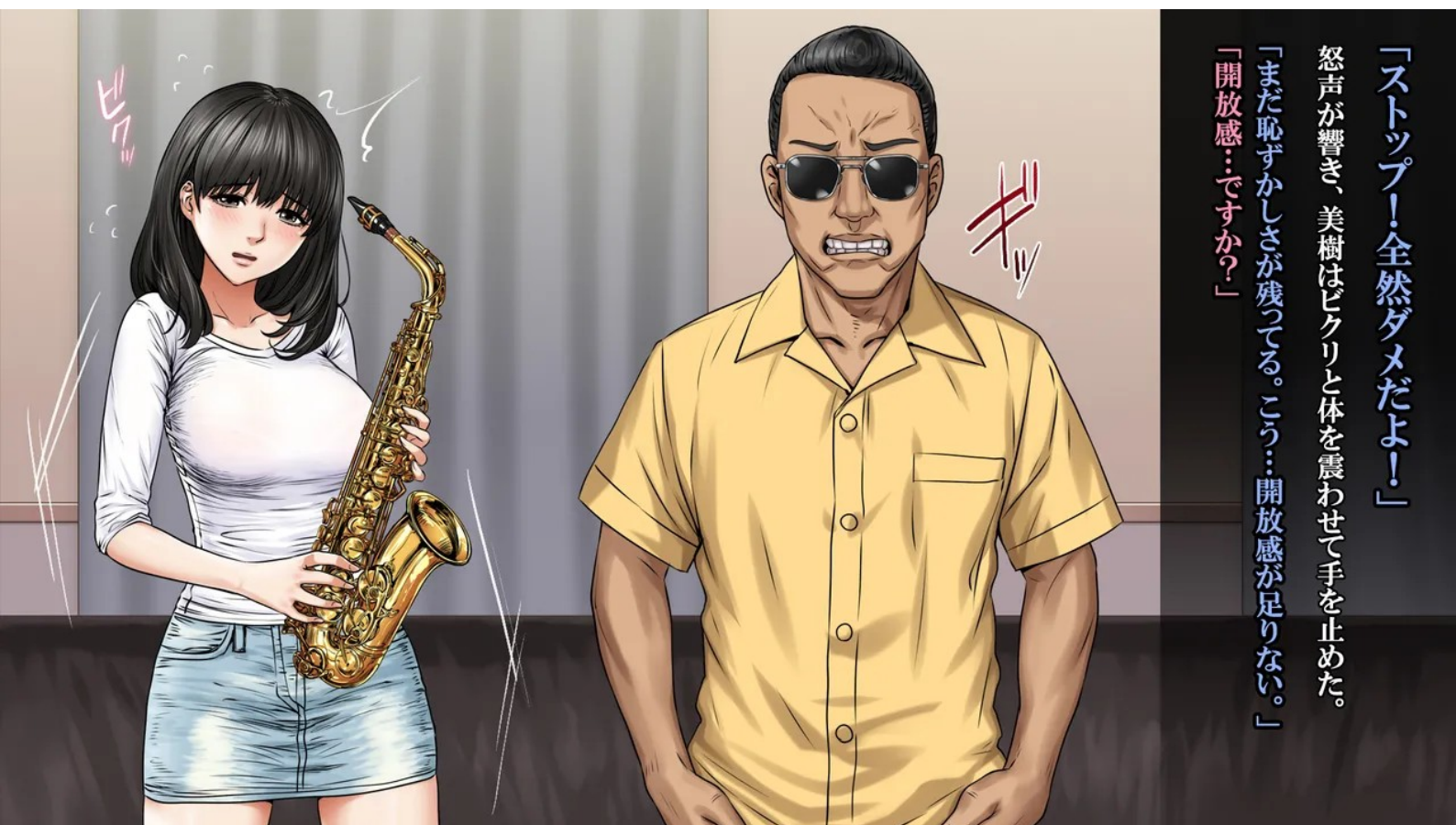
「音の伸びが悪いな。姿勢をもっと正して。」
「……は、はい。」

言われたように背をピンッと伸ばし、演奏を続ける。
今になってプロに見られているという事実には怖気つき始めた。





「全然ダメ。緊張で音が上ずってる。」
「……うつ……(思ったよりキツイ、かも……)」
「プロになったらもっと大勢の前で演奏するんだから
そんな探り探りの音じゃ、プロになれないよ。」
美樹は言葉に耳を傾けながら必死に演奏する。

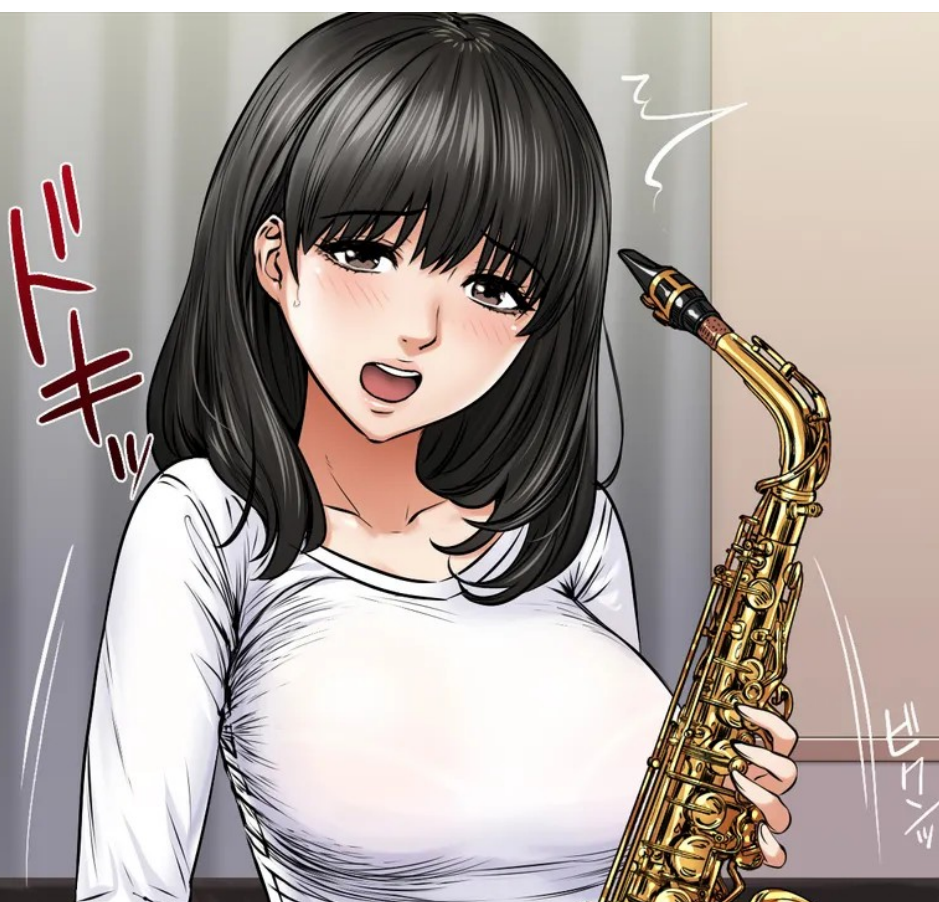


「ストップ！全然ダメだよ！」

怒声が響き、美樹はビクリと体を震わせて手を止めた。

「まだ恥ずかしさが残ってる。こう…開放感が足りない。」

「開放感…ですか？」



「やっぱこれが一番かな。……………服を脱いで。」
「えっ……それはちょっと……」
「何を恥ずかしがつてるのさ。そういうところがダメだよ。
これはちゃんとしたレッスンなんだから。」
男の強い口調に美樹は言葉を呑み込んだ。



「幸い今日は休みで誰もいないし、まだマシな方なんだよ。普段はみんなもつと人のいる前でやってるからね。」

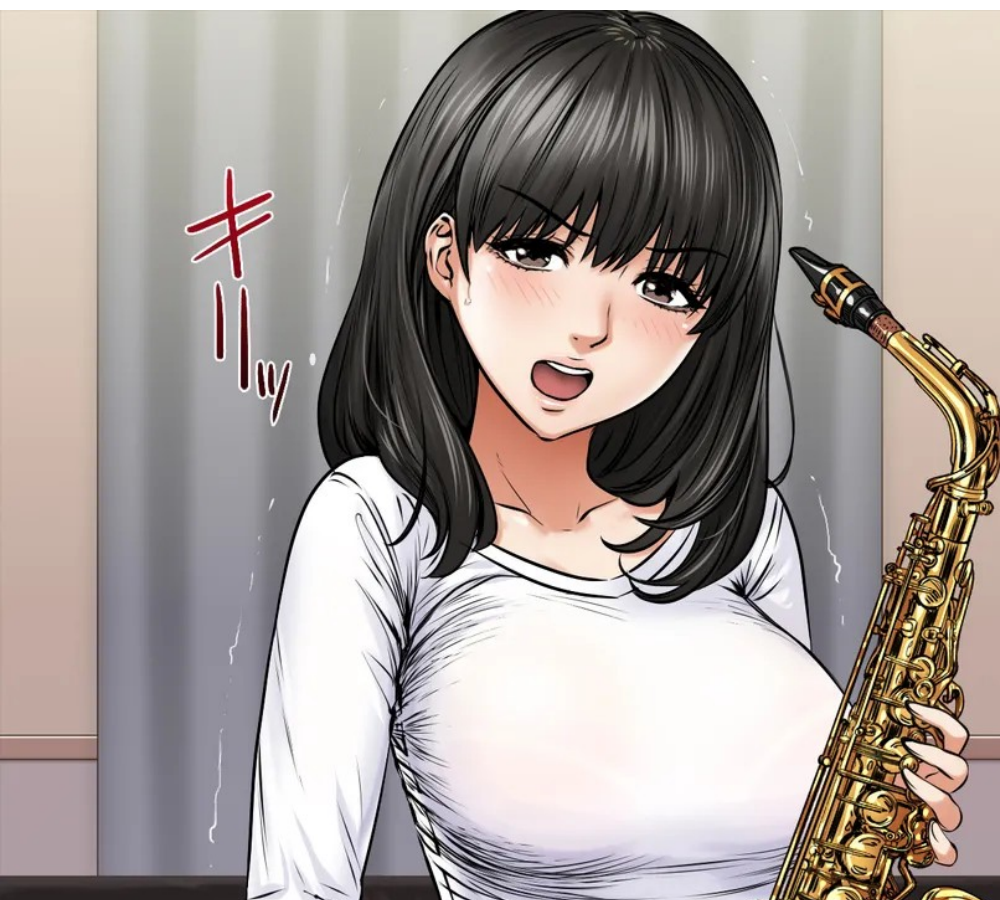
「そう…なんですか。」

（プロの世界って想像もつかないくらい厳しいんだ…）」

自分の思った以上の出来事に美樹はどんどん気圧されていく。しかし同時に、今プロに見てもらえる幸運を感じていた。

「わ、私……やります!」

決意を固め、美樹はそう答えた。



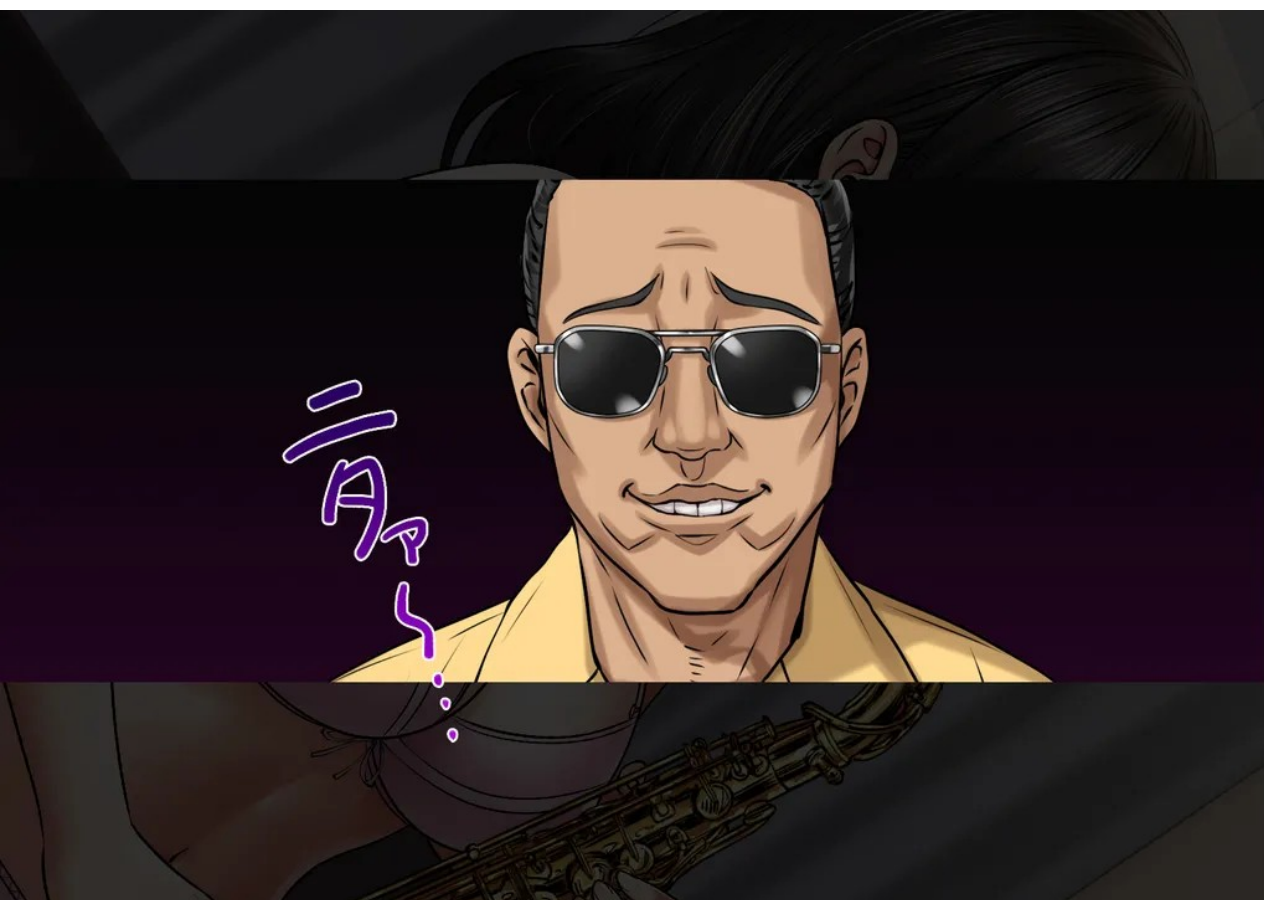


服を脱ぎ捨て、美樹は下着姿でサックスを吹いた。
「うっ……(やっぱり、恥ずかしい……)」

サングラスの奥から男の視線を感じる。

「……(中々いい女を見つけられたな)」

ニヤァ



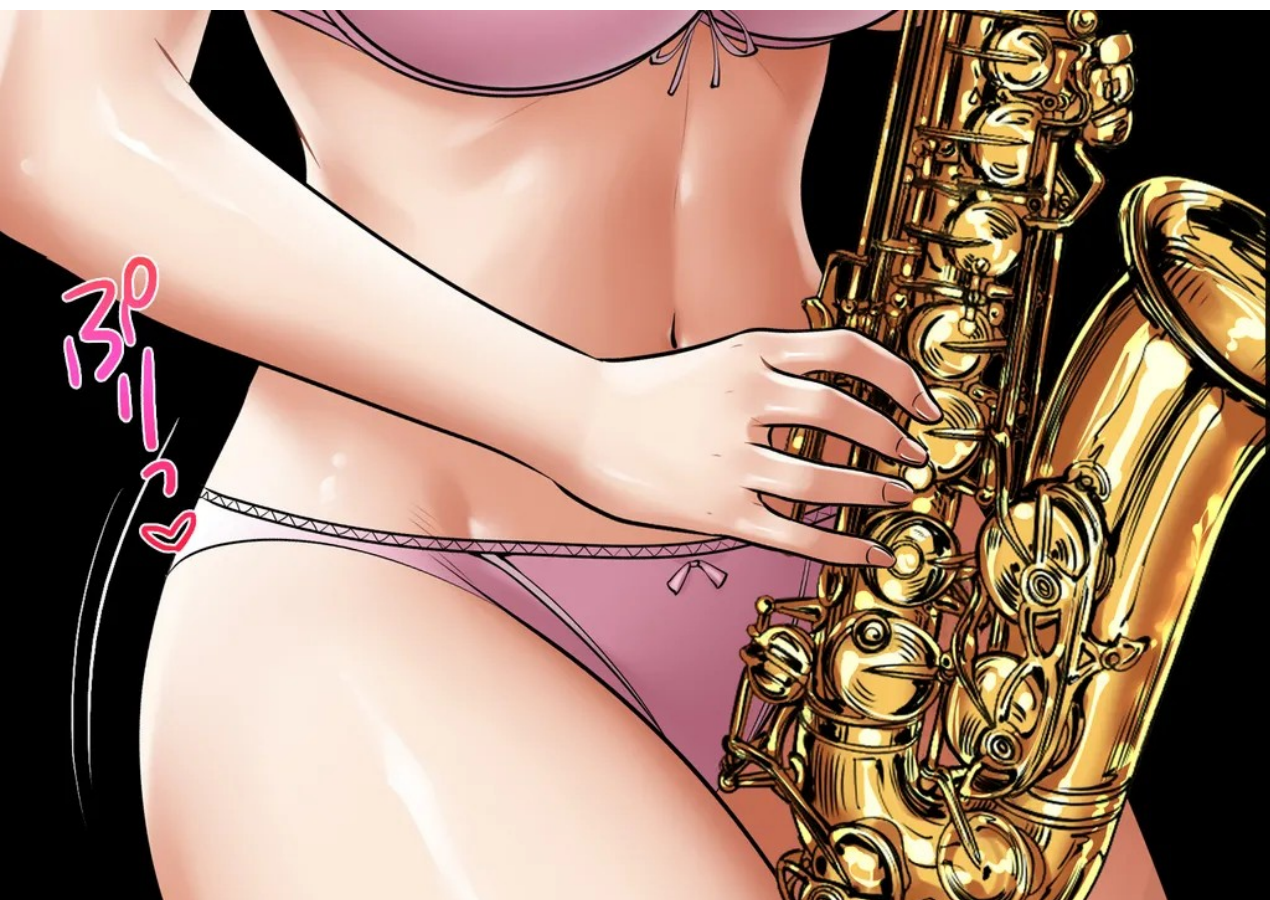
「……(へへっ、胸もでかいな)」

可愛いピンクの下着に視線が集中する。



「……(使われていなさそうなあそこもうまそうだな)」

更に視線を舐めまわすように下へとずらす。
微かに震える身体に男は興奮を覚えた。





「……(すごい見られてる。でもこれはレッスンなんだよ、ね?)」
見られている羞恥心を感じながらも美樹はひたすらに
サックスを吹き続けた。

「まだ緊張が拭えないな。」

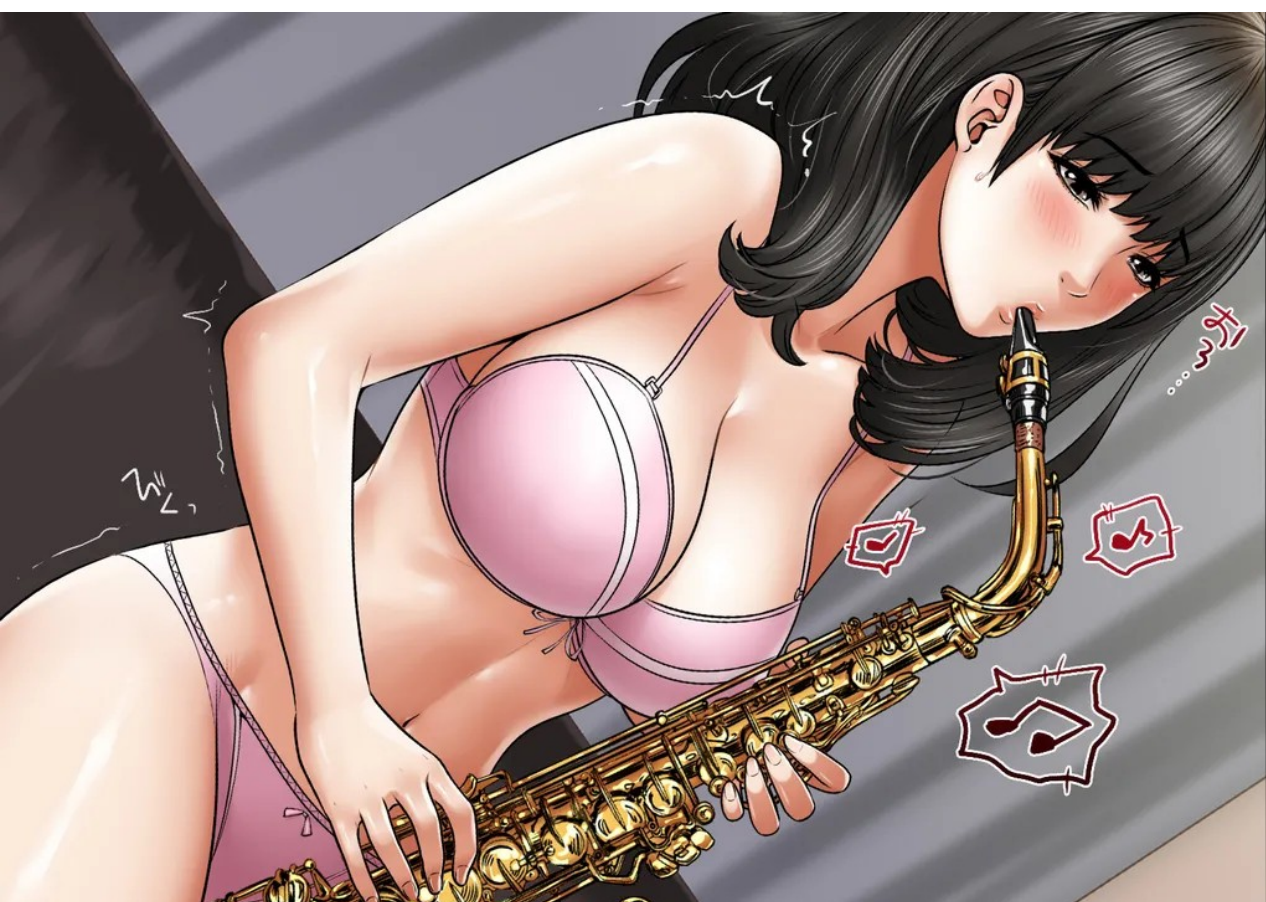
「……(うう…厳しいなあ……)」

男の不満そうな声に、美樹はさらに不安になる。
それが音になって響いているようだった。



「しょうがない。もう下着も脱いじゃおうか。」
「ええっ…!？」

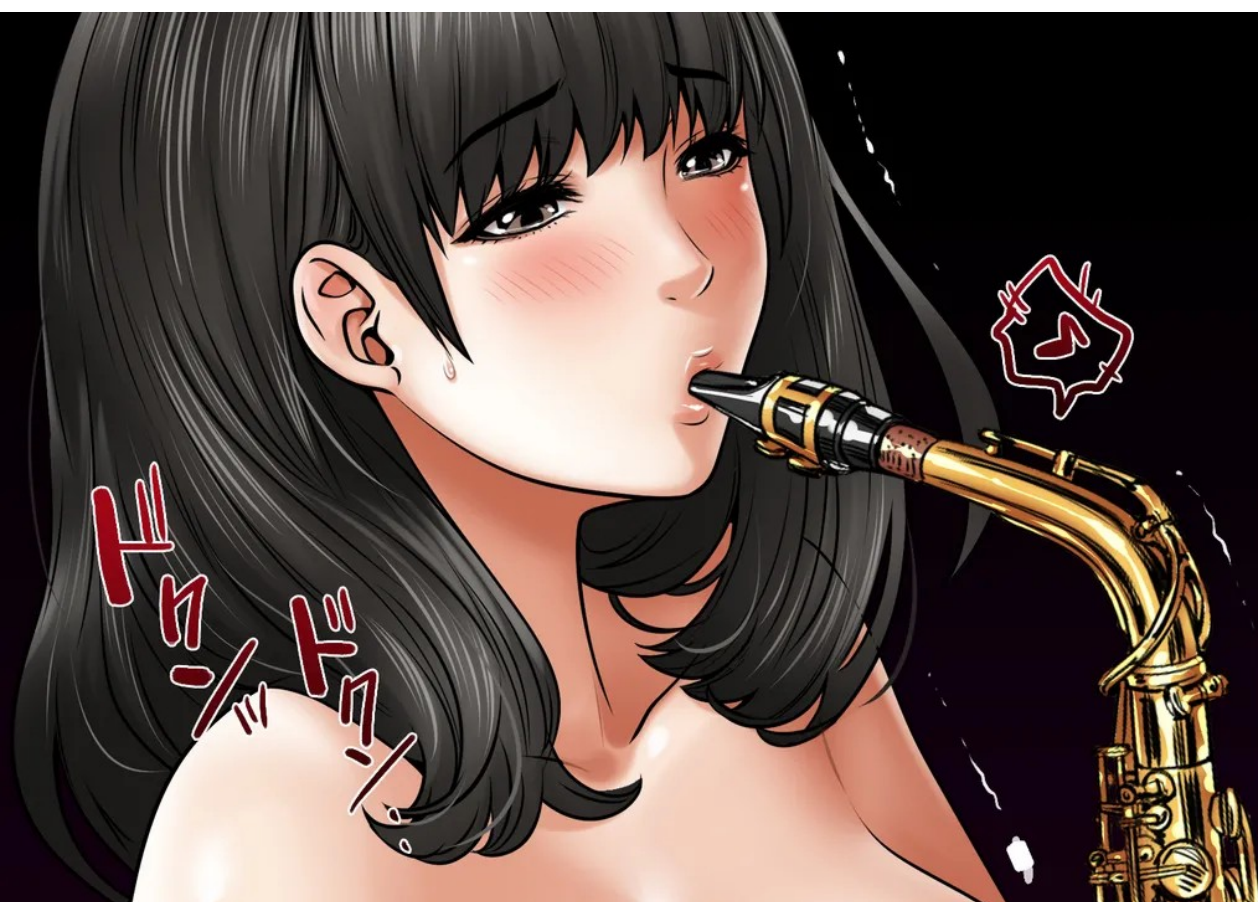
美樹はギョッとして演奏を止めた。
男はお構いなしに美樹の下着へ手を伸ばす。



「さあ、これで度胸付けていこうか。」
「ふえっ……(うそ、本当に裸…見られて…ううっ…)」
「大丈夫、大丈夫。俺はレッスンで見慣れてるから。」
そういながら美樹の体に手を這わせる。

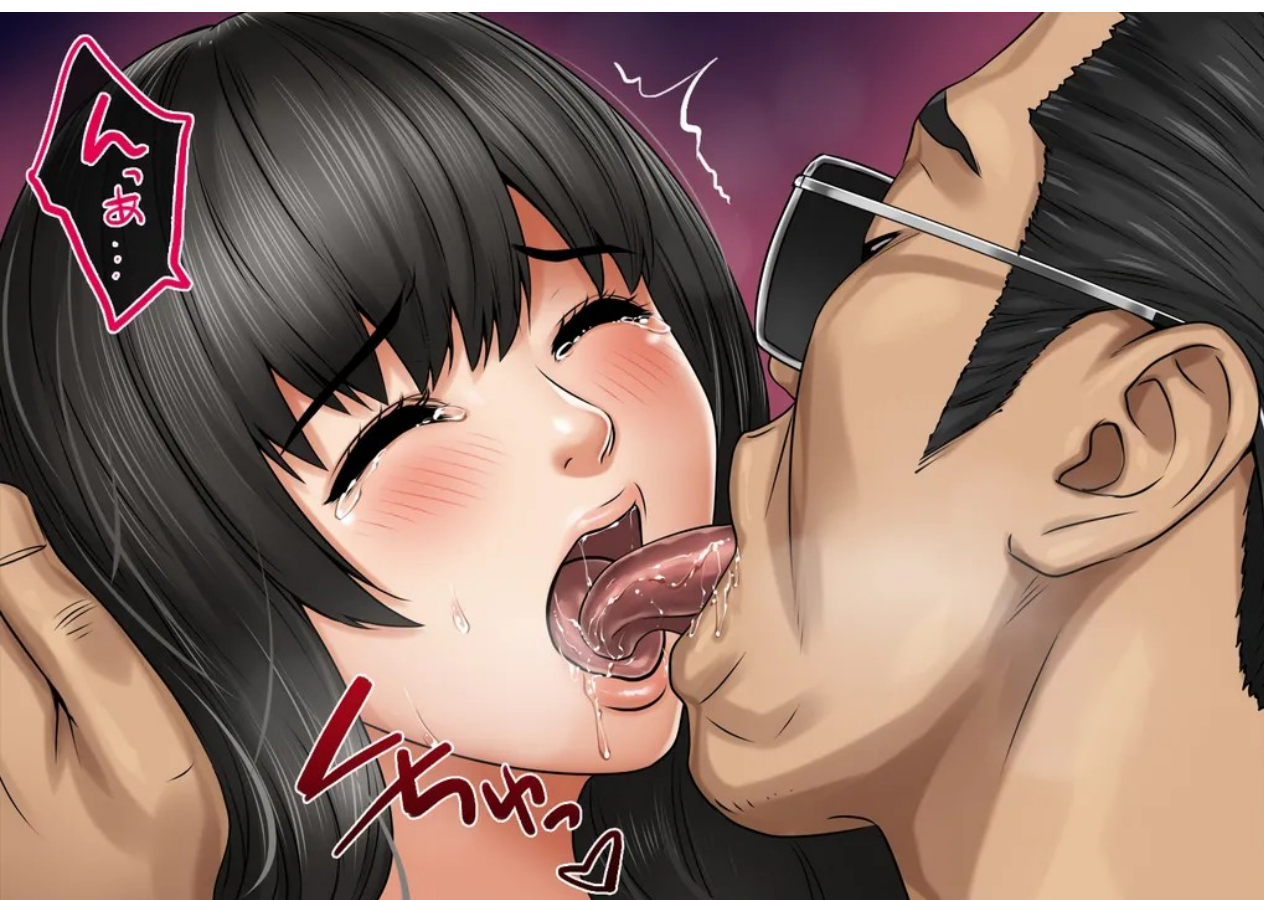


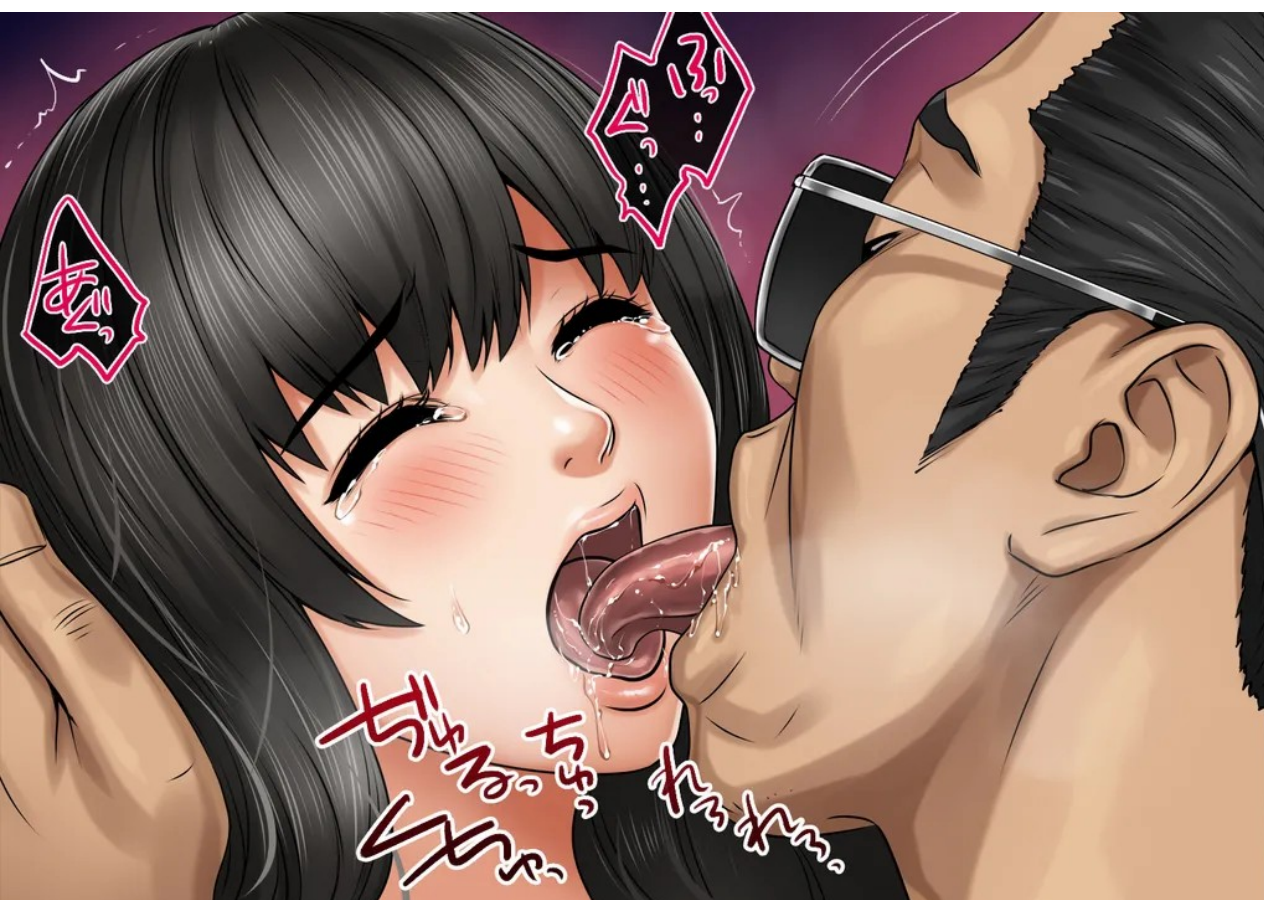
「ほら、しっかり演奏して。」
「んんっ……（恥ずかしすぎて演奏に集中できないよ……）」
「恥ずかしがってたら上手くならないよ。」
「はい……（集中…集中……っ）」



「ダメだね、呼吸がなくなてない。
教えてあげるから口をあけて。」

男は無理やり美樹の頭を引き寄せると、べろりと舌を絡めた。
突然のことに美樹は思わず目をグッとつぶる。





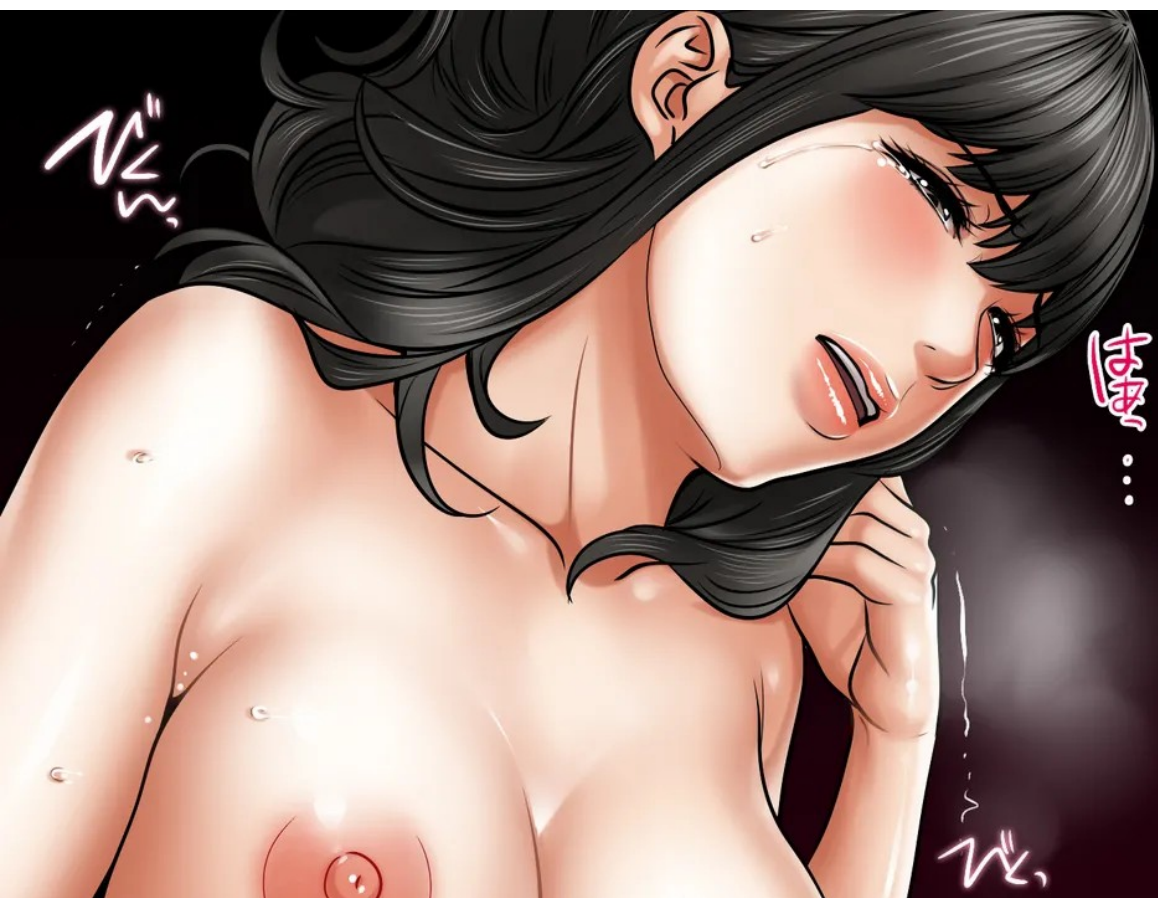
「んう、…むぐつ……（え、これ…キス、じゃ……）」
「ほらあ、せっかく教えてるんだからちゃんと舌出して。」
「れっ…あ、い……（レッスンなん、だ）」
何も知らない美樹はその行為をレッスンだと思い込み、
言われるがままおずおずと舌を絡めた。

「っ……はあっ、はあはあ……はあっ……はあ…」
「バテてる暇はないぞ。」
「ほえ……」

はあ…
はあ…

びと、

ん、



「上手く舌を使って舐める。」

初めてみた男性器に戸惑う暇もなく、顔を押し付けられる。
むせかえる生臭い匂いにせき込みながら、舌で舐めた。



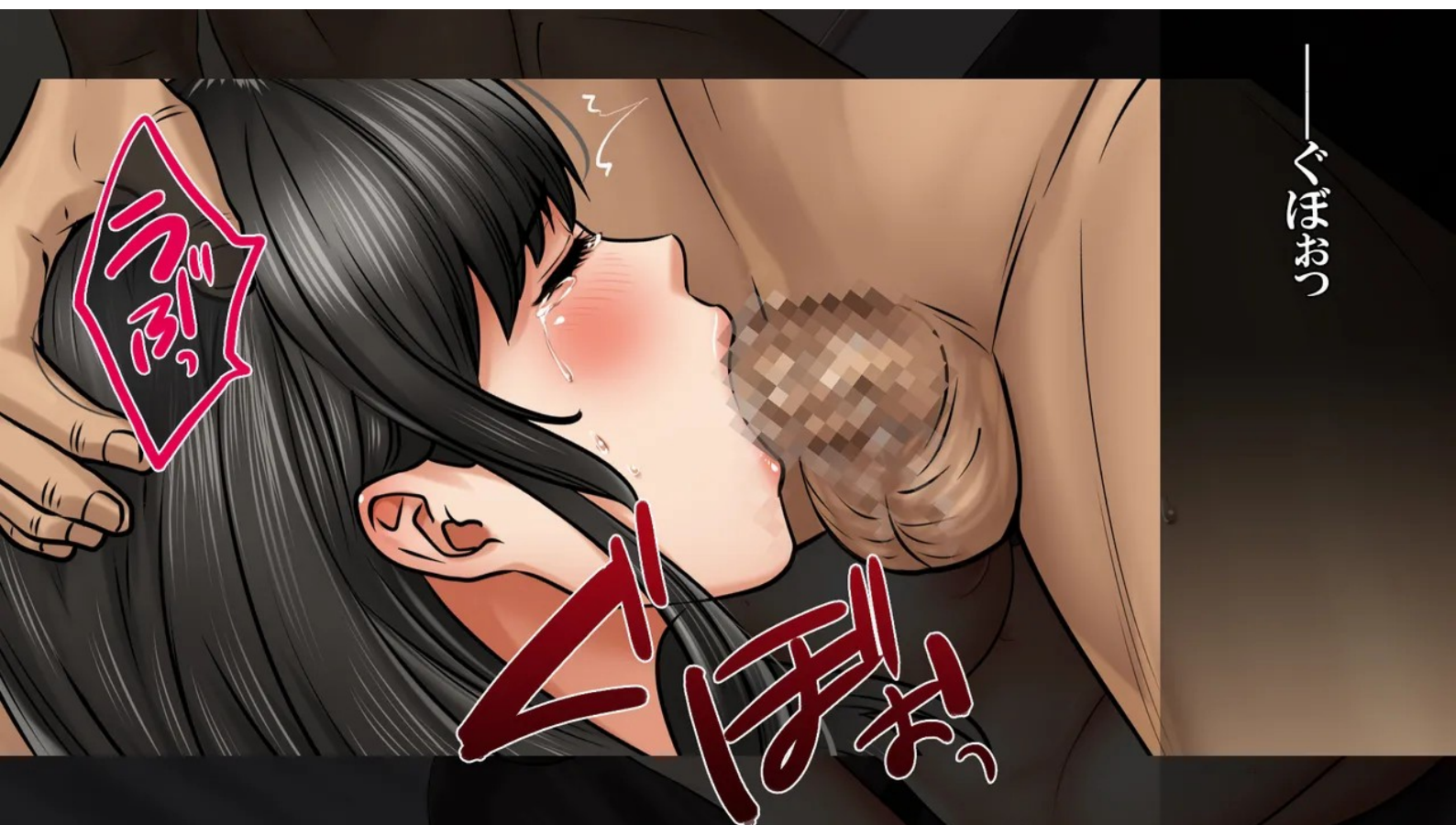
「うっ…おえっ…ふん…ふん…」

必死に舐めた。

何故こんなことをしているかなど…もう考える暇はなかった。



ぐぼおっ



「うぶっ……ぢゅ、ぢゅるっ……おっっ……」
「喉使え。おら、吸えつて。」
喉奥まで肉棒を押し込まれ、ぎき込む。
しかし、休む暇もなく男は腰を動かしてくる。

「うぶっ……ぢゅ、ぢゅるっ……おっっ……」
「喉使え。おら、吸えつて。」
喉奥まで肉棒を押し込まれ、ぎき込む。
しかし、休む暇もなく男は腰を動かしてくる。



「んぐっ……(の、の、の)……んぐっ……(の、の、の)」
「はあっ、はあはあ……いんど、あー、……きもちすてき。」

美樹の喉に肉棒がささる。

荒々しく喉奥を犯され、息継ぎするのが必死だった。



「おふっ……中々呑み込みが早いな。」
「んっ、ぐっ……ちゅるるるっ……」
（口の中ですよ！ビクビクしてる…）」
先走りの液をゴクリと飲み、言われた通りに吸っていると
肉棒がビクビクを脈を打ち出した。



「おつと…あぶねえ。出すトコだったぜ。」

「はぁ…はぁ……っ？」

「次は横になれ。」

美樹の口から肉棒がにゅるっと抜かれた。

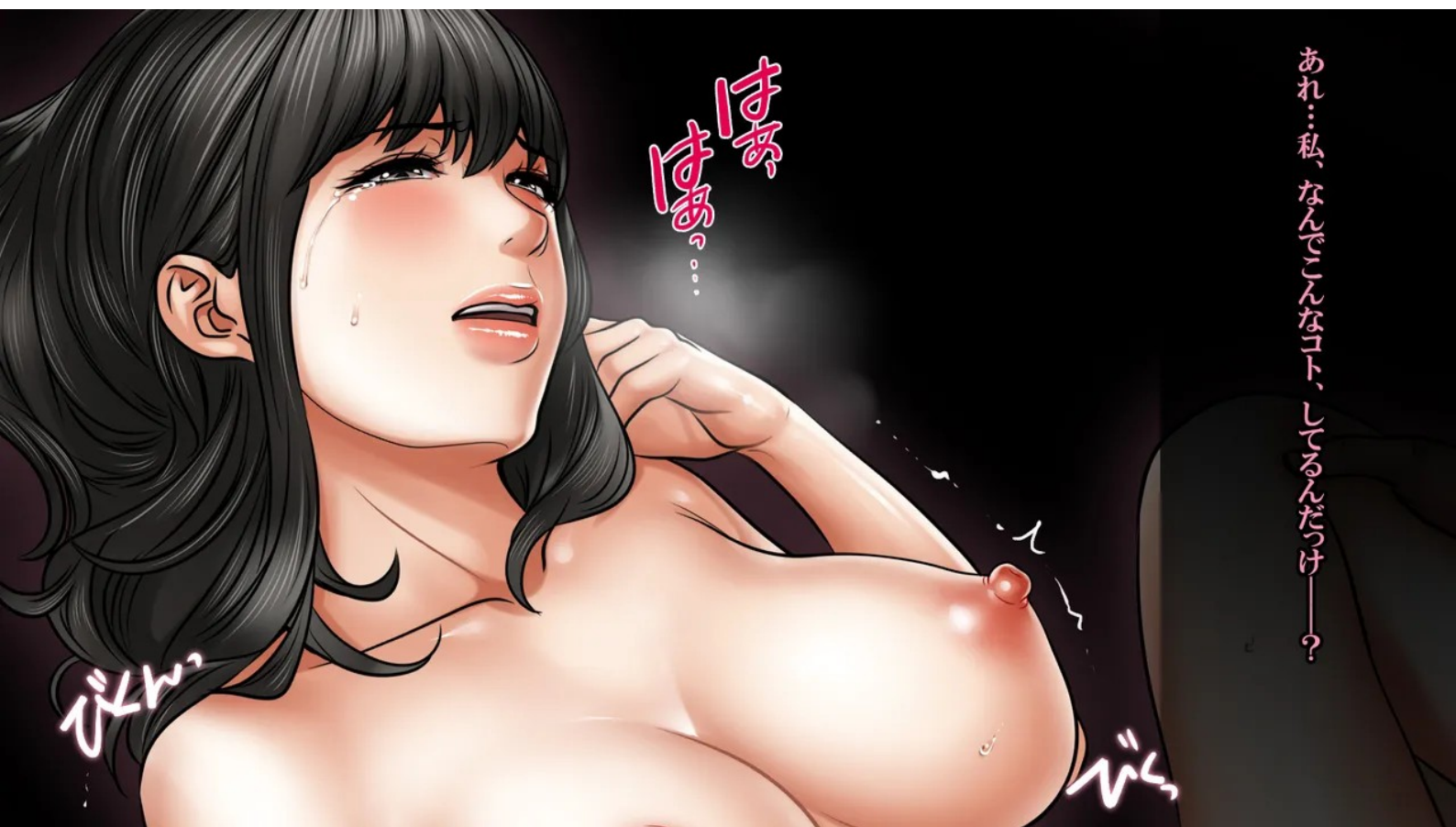
不思議に思っていると、次の命令をされてソファに倒される。





「なんだ、もうヌルヌルじゃないか。
ちんぽ舐めて興奮してたんだな。」
「はっ、い……っ。」

男が肉棒を美樹のあそこに擦りつけると、そこはすでに
ヌルヌルになっていた。



はあ
はあ...

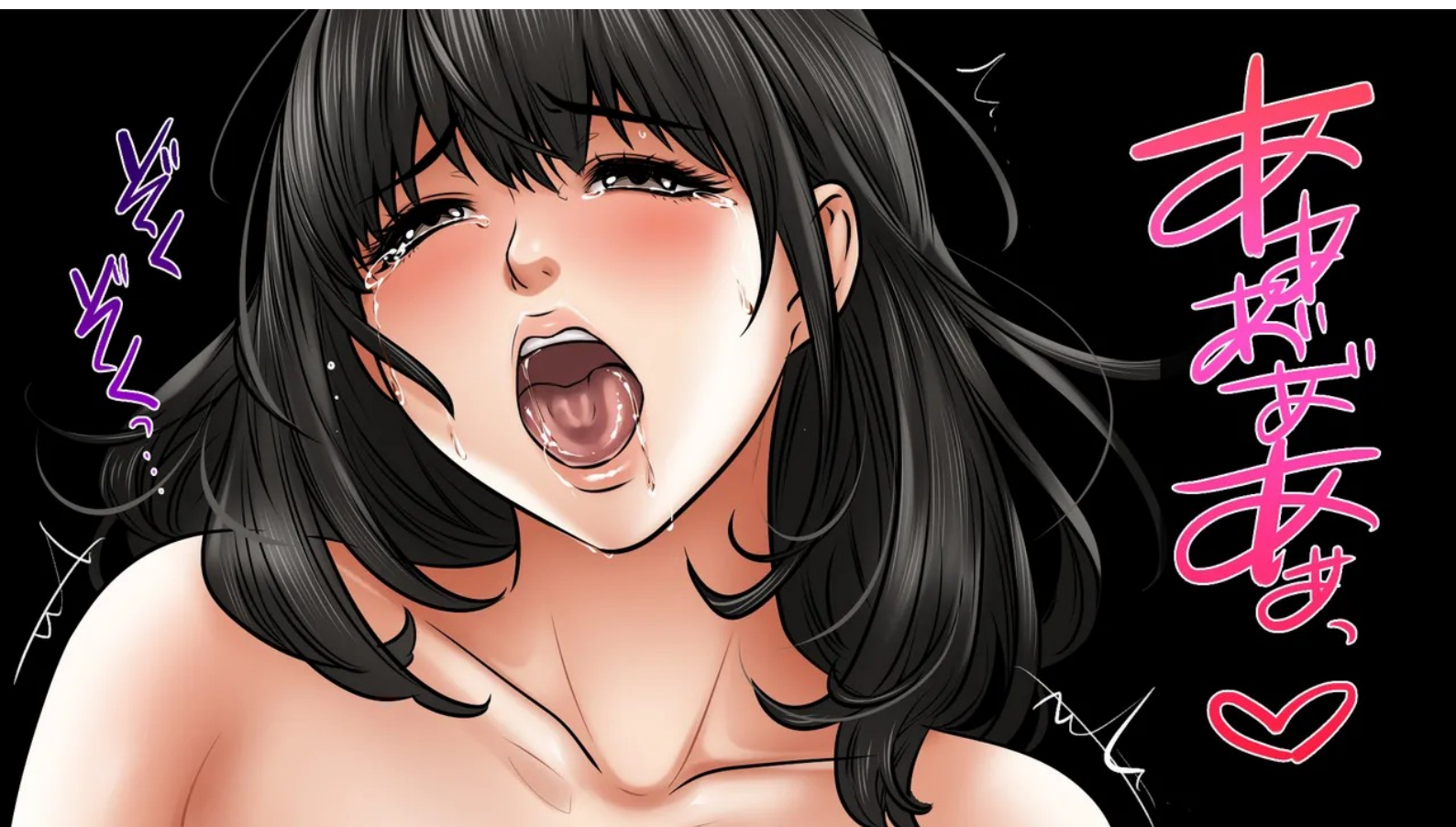
あれ...私、なんでこんなコト、してるんだっけ...？

びん

びん



ちゅん……





「あぐっ…いたっ、あああ…挿つて……」
「おお、これは…いい具合だ。」
「待つて……動かない、でえっ……」
ズブズブと膣内へと入ってくる異物に美樹は悲鳴をあげる。

「流石…使われてないあそここの締めりは最高だな。」
「あつ、あんつ…なに、これっ…」

美樹の静止も聞かず、男は腰を動かす。
激しい動きからくる快感の刺激に、意識が飛びそうになった。





「あつ…すつ…な、なんかきちやつ…あああつ…♡」
湧き上がる絶頂感に、美樹は呼吸が荒くなる。

「ほら、自分で動いてみな。」

「あひっ…♡まって、これさつきより奥にきて…る…っ。」

体位を変えられ、美樹はぶるっと身体をふるわせた。
子宮をつつく肉棒の感覚に力が抜けていく。



「まったくだらしがないな。」
「あんっ…はっ♡うごいちゃ、だめっ…れす……」
下から突き上げられ、美樹は声をあげた。



「ココがいいんだろ？」

「あひいっん…♡あぁっ、そこお…っ♡♡」

グリグリと美樹のいいトコロに当たるようせめる。
その度に甘い声があがり、膣内を締め上げた。



「本当、扱いやすい女だぜ。」
「あつ、あつ……なんつ、で……っつ……」
「ちよつと話を合わせてやれば簡単に言いなりだもんな。」
「そんなっ……ああつ……♡」

「本当、扱いやすい女だぜ。」
「あつ、あつ……なんつ、で……っつ……」
「ちよつと話を合わせてやれば簡単に言いなりだもんな。」
「そんなっ……ああつ……♡」

「本当、扱いやすい女だぜ。」
「あつ、あつ……なんつ、で……っつ……」
「ちよつと話を合わせてやれば簡単に言いなりだもんな。」
「そんなっ……ああつ……♡」

「本当、扱いやすい女だぜ。」
「あつ、あつ……なんつ、で……っつ……」
「ちよつと話を合わせてやれば簡単に言いなりだもんな。」
「そんなっ……ああつ……♡」





「安心しろ、ちゃんと面倒は見てるよ。」
「あああつ……♡そこ、やああつ、んん……♡♡♡」
「俺のセフレとしてな」
「セッ……フレ……っ……っ」



「うそっ…つぎい……♡」
「はんっ！よがつてる女が何言ってるんだよ。」
腰を深く打ち付ける度、美樹は甘い声をあげる。
胸をブルンツとたゆたみ、髪が激しく乱れ揺れた。

「あつ、ああつ♡あんあんあんっ…♡♡」



「気持ちいいんだろ？ほら、言わないとやめるぞ？」
「あつん♡…やあつ…やめちゃ、りやめ……え
いっ…ですう♡……気持ち、いいすっ♡♡」

男のピストンが緩やかになり、美樹は慌てて声をあげた。
そして自ら腰をグイグイという所に擦れるように動かす。



「はあっ…はあはあっ……そろそろ、射精る、ぞう…!」
「あつ、あつ…♡ああつ……な、なにか、くるっ…♡♡」
「初物のくせにもうナカでイくのか!とんだ淫乱だな」
「イっ、く…っあうっ…あつあつあつ…あん…」

「イク時はちゃんと言いなからイケ、よっ!」
「あぁっ♡……イ、イクっ♡」

全身に混み上がる快感が絶頂へと導かれていく。
何度も息を浅く吐き出し、腰が徐々に浮き上がる。





「あああああああつ——♡」



「おっ...おっ...射精るっ...」

グッと最後に最奥を一突きした。

「はあはあはあっ……」

「あっ……あう……はあはあっ……あ……」

男は肉棒を引き抜き、自らの手でしごき始める。

美樹は絶頂の勢いにうまく呼吸ができず、必死に息をした。





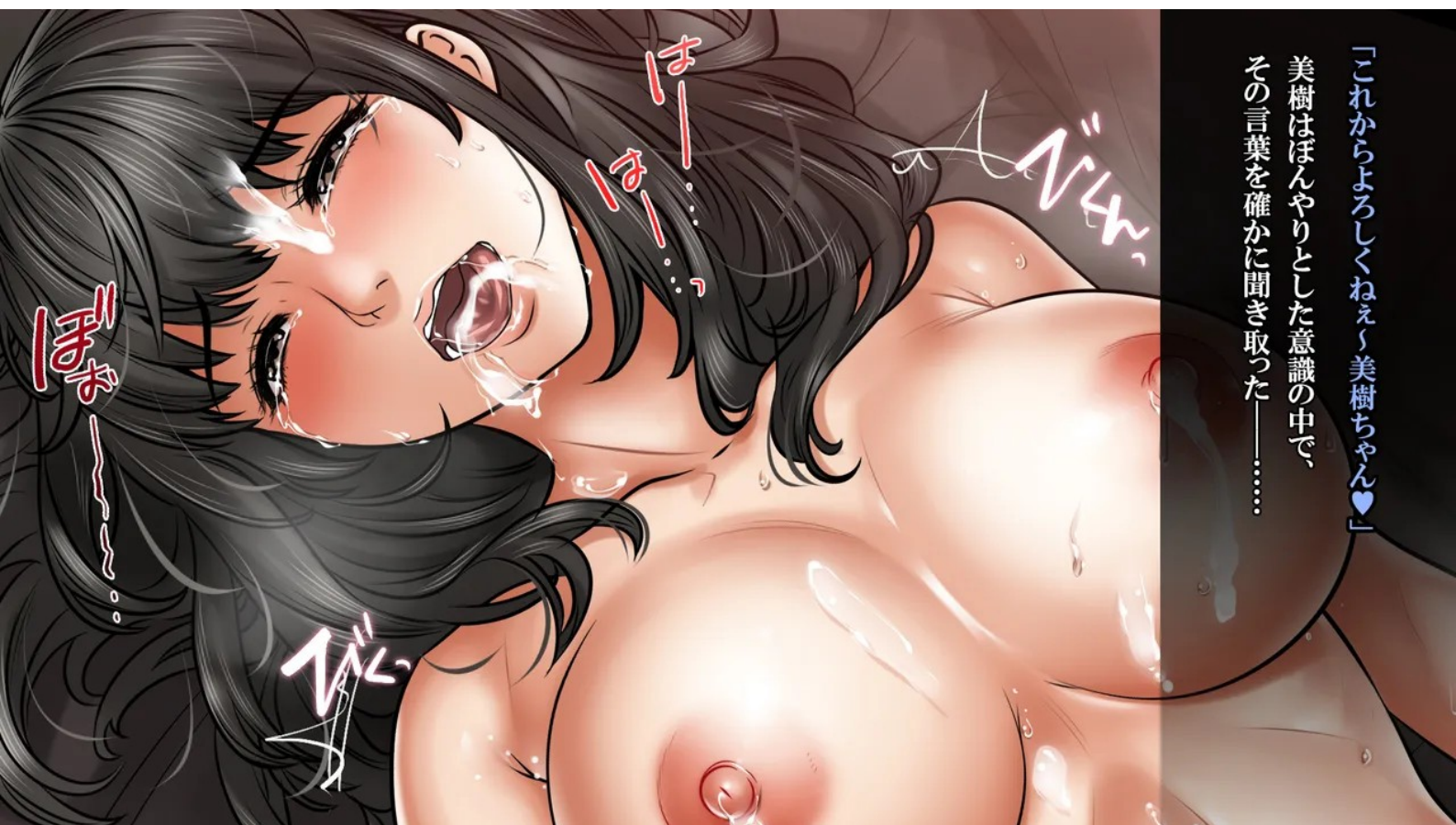
どろろー……

「あつ、うう……」
「ちよつと飛ばしすぎたか。まあ、こんなもんだろ。」

精液で身体を汚した美樹を見ながら、男はそう呟く。
体中が痙攣しているようにビクビクと軽く震えていた。



「これからよろしくねえ、美樹ちゃん♥」
美樹はぼんやりとした意識の中で、
その言葉を確かに聞き取った……





氏名
KONNO MIKI
紺野 美樹

誕生日 **4/17**

BWH **88/57/84**

バストカフ **F**

血液型 **A**

職業 **学生**

性格
努力家で人のいうことを丁寧に聞いてあげる素直な性格。少々異質な部分や他人の目を気にする点もあるのだが、好きなものには情熱的で行動派。

シチュエーション

進学校に通う優等生の美樹は、親の圧力から幼い頃から勉学に励み、努力を続けてきた。しかし、サックスと出会ってからその魅力に惹かれ、没頭し、成績がおろそかになっていってしまい、両親と衝突。愛用のサックスを手に、家を飛び出してしまふ。その先で出会った、音楽関係の仕事をしているという男の言葉に乗せられて、ホイホイとついていってしまう。人生経験の浅い美樹は、男の言われるがまま……

レッスンの為だと服を脱がされ、下着を脱がされ…
そして最後には肉棒を奥深くまで挿入される♥♥



一人称 **私**

二人称 **貴方**

家族構成

父親・母親
愚痴をこぼす為のサボテン

好きなもの

サックス (音楽系)
チーズフォンデュ
音楽好きな人
クンニ♥

嫌いなもの

勉強 (でもやる)
めんどいこ
強要する人
音読め♥



ステータス

【体力】
もともとスポーツ万能型で、力も女性平均値よりやや高め。なにより、楽器をしているせいか、肺活量がすごく、息が長く続く。

【持久力】
運動ができる分、持久力も平均よりやや高め。しかし、意外と継続的な運動をするとすぐに肩が凝ったりして筋肉痛になる傾向がある。

【知識力】
平均的。学力は親に言われて勉強している為に悪くはない。でも、音楽に没頭するあまりに成績が落ち気味になっているのが悩み。

【エロ度・テクニック♥】
勉強・音楽とやってきたため、男性関係には疎く自分に好意を寄せている人に対しては十分鈍い。ただ、相手が自分をエッチな目でみているのにはすごい敏感で、少々男性に対する恐怖みだいなものもある。エッチの知識は親し本から……

